



セイント・スイート・ホーム

前橋梨乃

公開版

for Smart Phone

Contents

1

2

3

4

5

6

7

8

★タップすれば各章へジャンプします

1

相原 充みつるが、二つのサムソナイトに航空会社のタッグを結びつけようと身を屈めたとき、その目の前を、高いヒールの真っ赤なパンプスが通り過ぎた。

充は思わず手を止め、その女の後ろ姿を目で追った。すらりと伸びた白い脚。体の線にぴっちりとはりついた膝上十センチのレザースカート。後ろにはさらに十五センチほどのスリットが入り、内腿の肌が見え隠れする。

本人は意識しているのかいないのか、歩き方はいわゆるモンローウォークだ。歩調に合わせて、形のよい琵琶型のヒップが、弾かれるように、体の中心線から

左右にずれる。

肩パッドの入った赤いジャケットの背中では、栗毛色のロングヘアが、媚びるように、誘うように揺れている。

(ああ……あの女は……、僕だ)

充の思考は、いつものように、空想の世界へとトリップした。

……空港ビルの国際線ロビー。

その広く明るい空間を、周囲の人々の視線に晒さらされて歩く、女装の自分。

男たちの淫靡な目は、当然ながらスリットから見える太腿に集中する。

ボデイラインを保つために着ているハードな下着は、その視線以上に体に食い込み、胸で揺れるシリコンゴム製の乳房は、汗ばんで肌に貼りつく。

スカートの下では、ボデイスーツに無理な形を強い

られた” “それ” が、必死に立ち上がろうと頭をもたげる。太くなつたその先が、歩を進める両腿のつけ根と、いやがうえにも擦れあい、自分のものでありながら、まるで張型でも挟んで歩いているよう。すでに、その先からは「愛液」がにじみ出て、下着を濡しはじめている。

まわりにそれを気取られまいと、必死になに食わぬ顔を装ふことの苦痛が、さらに感覚を研ぎ澄ましてい

く。

意識が、恍惚の世界で、ハレーションを起こす。

(∴∴ああ、このまま、いつてしまいそう∴∴)

∴∴充は、空想の中の自分の恍惚と、そして、それが空想でしかないことの無念さに、目を閉じ、下唇を噛んだ。

「充さん、なに、ぼーっとしてるの。早くカウンターまで運んでよ」

すぐ後ろで、妻の紗織のいらいらした声が響いた。

「あなたって、いつもそうなんだから。何考えてんだか。そんなだから、いつまでたっても、私たち、パパに認めてもらえないのよ」

われにかえった充は、紗織の嫌みっぽい口調を無表情で受け流し、二つのサムソナイトを両手で持ち上げようとした。しかし、一五五センチの貧弱な体に、そのトランクは大きすぎた。

しかたなく充は、二つのトランクを引きずって、JALの出国カウンターへと運んだ。

その姿を横から眺めていた栗原恭子は、鼻で笑うような仕草をした後、娘の紗織の方を向いた。シルクのワンピースの上からでも、どでんとした肉のたるみが見える腹のあたりで、ゴールドのチェーンベルトが、じやらじやらと鳴った。

恭子と紗織を背にしながらも、充には、二人が視線

の中に交わした会話が手にとるように読み取れた。

（あなた、よりにもよって、なんでこんなみっともない男と結婚したの？）

（しかたなかったのよ。こんな人だなんて思わなかったんだから……）

苦い思いをかみしめながら、充がJALのグラウンドホステスに荷物を預け、振り向くと、すでに恭子と紗織は、出国ロビーにつながるエスカレーターの方へ向

かっていた。

二人の後ろ姿を見やり、充はちよつと舌打ちしたが、しかたなく、小走りに後を追った。

「……あ、充さん。いたの？」

紗織が後ろを歩く充に気づいたのは、エスカレーターに乗る寸前だった。

「いい？ 今日から十日間、パパと二人つきりになるんだから、うまくやってよね。気に入られるとは言わ

ないけど、パパを怒らせたらしらないで」

紗織は、耳打ちするそぶりで言ったが、その声は恭子にもしつかり聞こえていたようだ。恭子の腹のチエーンが、またじやらじやらと鳴った。

「ああ、わかってる。じや、気をつけて……」

充の言葉にうなずきもせず、二人の女はエスカレーターに乗り、階下へと降りて行った。

「なにが、パリコレだよ！」

駐車場に停めたBMWのシートに体を投げ出し、充は吐き捨てるように独り言を言った。

今日は金曜日。アパレル商社勤めの充は、本来なら会社に出ていなければならぬ日だ。

それなのに、昨夜紗織は、ごく当然のように言った。

「あなた、明日、いいわね」

パリのオートクチュールのショーを見に行く恭子と紗織を、成田まで送れというのだ。

「タクシージャや駄目なのか？」

充が聞くと、紗織は、「タクシートの運転手に、トランク二つ、カウンターまで運べって、頼むの？」と。

そして結局、今朝、充は会社へ「体調が悪いので休ませてくれ」と電話したのだ。

「……要するに俺は、体のいいお抱え運転手ってわけ

かよ」

イグニツションキーをひねりながら、充は毒づいた。しかし、華奢な体と童顔の充には、その口調はどうにも似合わない。

そのことに自分でも気づいた充は、ルームミラーを調節して、そこに自分の顔を映してみた。

男にしては黒目がちの大きな瞳が、こちらを見つめていた。

「……いいわ。今日から、あたしひとりで、思う存分楽しんでやるんだから」

充が紗織と知り合ったのは今から二年半前、充が二四、紗織が二一の時だ。

充の会社は業界では中堅クラスだが、内外のいくつかのデザイナーズブランドをスポンサードしていることとで有名だ。当時充は、会社が都内のデパートに出店

しているある高級ブランド店の販売員として出向させられていた。

まだ大学生だった紗織は、月に何度となくその店に顔を出した。アメックス・ゴールドの家族用カードを使い、来るたびに高価なワンピースやスーツを買って行った。当然、充にとってこの上ない「いいお客様」だったわけだ。

紗織はけっして醜くはないものの、シャープな美人

とは言えない。都会的でマニッシュなデザインを基調とするそのブランドが似合うとは言いがたかったが、充は、苦勞しながらも、熱心にアドバイスし、コーディネートした。

「相原さん、オペラのチケットが手に入ったんだけど、今度の金曜、私をエスコートしてくださいませんか？」

最初に会ってから半年目頃、紗織はそんなふうに充を誘ってきた。

背は人並以上に低く、スレンダーな体で、男としてはけっして魅力のある方ではない充に、どういふわけか、紗織は惹かれたらしいのだ。

オペラなどに興味はなかったが、上得意を失いたくなかった充は、紗織の誘いに従った。そして、紗織はそれを、充の好意だと勘違いした。

それからは頻繁にデートに誘われるようになった。べつに意中の人がいたわけではなかった充も、仕事の

都合がつけば約束の場所に出向いた。

男と女がそんなふうにごデートを重ねていけば、それぞれの思いとはべつに「恋人同士」という既成事實は、なんとはなしにできてしまうものだ。

強引で積極的な紗織に押されるように、充の方も、紗織のことを「恋人」だと思ふようになっていった。

充にはもともと、そんなふうにご、主体性なく、状況に流されがちなところがある。

もちろん充にも、それなりの計算がないわけではなかつた。紗織の父、栗原耕造は、都内一等地に三十棟近くの大きな物件を持つ貸しビル会社の社長。その個人資産規模は、長者番付にもときどき顔を出すことからもよくわかる。つき合っていて、けっして損はない。

ただし、誤解がないように言っておけば、充はそんなに積極的に、いわゆる「逆玉」を狙っていたわけではない。「別れるなら別れるでそれまでのこと」と、

その程度に思っていたのだった。

ところが、紗織の方は、一方的に燃え上がった。最初のキスも、そして、最初の肉体関係も、充の側から誘った形にはなっているが、あれはあきらかに、そうせざるを得ないように、紗織が仕向けたのだ。

そして、つき合いだして半年後、大学卒業をひかえた紗織は、充に、「パパとママに会ってほしいの」と言った。

充は一方で期待しながら、一方では危惧を抱きながら、紗織の両親に会った。

案の定、栗原耕造と恭子は、その結婚話に猛反対した。

充は、二流大学出のサラリーマン。新潟にいる父も、小さな市の地方公務員にすぎない。「身分」として、いかにも違いすぎた。充もその点はじゅうぶんに承知していたから、反対されれば、身を引く覚悟でいたの

だ。

ところが紗織は、頑として、自分の意志を通そうとした。二人の交際にすら反対した耕造に対して、紗織は錯乱したように暴れ、ついにはハンガーストライキという手段にまで出た。

財界一の紳士として名の通っている耕造は、一人娘が日々すすさんで、やせ細っていく姿を目の当たりにしていられなかったのだらう。結局は折れ、今から一年

前、充と紗織は結婚したのだ。

そして、その日から、充の屈辱の日々が始まった。

豪勢な結婚式とハネムーンを終えて帰国した充を待っていたものは、娘をどこの馬の骨とも知れない男にさらわれた耕造と恭子の冷たい仕打ちだった。

充と紗織の新居は、栗原家の敷地内に離れとして新築された。結婚当初は別として、紗織は料理などすすんでする方ではなかったし、母屋には家事を任された

二人の家政婦がいたから、お互いが家に居合わせれば、日々の食事などは、二世帯いっしょにすることになる。そんなとき、恭子は充に対し、言葉遣いは丁寧でも、そのじつ見下したような態度をとる。耕造にいたっては、口をきくどころか、充の顔を見ようともしない。まるで、そこに存在しないかのように振る舞うのだ。

栗原家にとって、充は、完全な「よそ者」。家政婦以下の存在なのだ。

それに対し充はどうすることもできない。ただ耐えて、できる限りなに食わぬ顔で暮らす以外に方法はなかった。

そんな充を見ていて、紗織も恋愛時代の熱が急速に冷めてきているようだ。

そもそも紗織は、結婚さえしてしまえば、耕造が、充を後継者として自分の会社に招き入れるものだと思っ
っていたらしい。ところが、耕造はそんな素振りさえ

見せない。いつまでたっても、充はアパレル企業の一介のサラリーマンのままなのである。朝早くから出社し、あくせく働いている充と、資産家で会社社長である父と同じ屋根の下で見たいれば、どうしても、充が色あせて見えてくる。わがままではあっても、父のことを男として尊敬しているらしい紗織が、充に対して失望の念を抱くのは時間の問題だった。

今の東京ではどんなに金を積んでも手に入らないよ

うな豪邸に住み、高級外車を乗りまわしている充だが、その生活はもはや風前の灯。いつ離婚を言い渡され、放り出されてもおかしくないような状況なのである。

2

BMWを邸内のガレージに入れ、離れに向かおうと母屋の裏庭を歩いているとき、充は、そこで掃除をしていた家政婦を見つけた。

「あ、浜田さん。お義父さんは？」

「先ほど会社へお出かけになりました」

「今日は、お帰りは早いの？」

「いえ、午後からロータリークラブのゴルフコンペだとかおっしやってましたから、雨でも降り出さなければ、たぶんご夕食も外でだと思えます」

「そう。それなら、僕も今日はいいや。離れの冷蔵庫にあるもの、何か見つけて食べるから」

「はあ……」

「ちよつと疲れちゃってさ。眠りたいんだ。何時に起きるかわからないし」

「……具合でも、お悪いんですか？」

「いや、それほどのことでもないんだけどね。たまに紗織がいないんだから」

充が自嘲を交えたおどけた表情で言うと、家政婦もどこか同情したふうに笑った。

「あ、それに、そんなだから、今日、離れのかたづけもいいよ」

「はい」

充は、彼女たちが離れに入って来ないように、そうつけ加えた。

離れの玄関を入ると、充は迷わず書斎に向かった。

そこにある黒檀のデスク。そのいちばん下の引き出

しは、この家の中で唯一、充だけが鍵を持っている場所だ。充はそこから、菓子箱のような紫色の箱と、樹脂製の小瓶を取り出し、すぐ部屋を出た。

小瓶をバスルームに置き、コックを開いて湯をため始める。その間に充は紫の箱を二階の寝室に置きに行った。

戻ってくると、バスの湯はちょうどいいくらいになっていた。

充は、着ているものをすべて脱ぎ、一度バスタブにつかって軽く汗を流してから、すぐ上がった。例の小瓶をとり、その中からどろどろした白い液体を掌に出す。それを両脚、つづけて両腕に厚みを持たせて塗る。

小瓶の中身は、脱色剤だ。本当は脱毛したいところだが、それでは紗織が十日後に帰国する頃に、次の毛が生えはじめる。ベッドで肌を合わせたら、ちくちくして異常に気づかれてしまうはずだ。脱色だけで我慢

するほかない。

十分後、ごわごわに固まりかけた脱色剤を洗い落とすと、その下から、ちよつと太めの産毛が金色に光る肌が現れた。もともと色白で、体毛は濃い方ではないから、それだけでも遠目にはじゅうぶん美しい肌に見えた。

紗織がいつも使っている高価なボディソープで体を洗い、髭も丁寧にあたってからバスルームを出た充は、

バスタオルを体に巻きつけた姿で、二階へつづく階段を昇った。

寝室に入ると、充は壁際のチェストを開けた。

ショーツやパンティ、ブラジャーやその他のファンデーション、ランジェリー、ストッキング、そしてナイティ：：紗織一人で使うには多すぎるほどの数の下着類が、五つの引き出しに分けて入れられている。充は、その中から、気に入ったデザインのショーツとブ

ラジャーを選び出した。

どうせ、いつも家政婦に洗濯させ、仕舞わせているのだ。少しくらい中の配列が変わったところで、紗織は気づきはしない。

シヨーツをはき、ブラジャーを着けた充は、先刻の紫の箱を開ける。

そこに入っているのは、本物そっくりにつくられたシリコンゴム製の二つの乳房だ。蓋を開けた振動の余

韻で、濃いピンク色の乳首が、ぷるぷると揺れている。充はそれをひとつずつとって、ブラジャーのカップの中に入れた。

充は紗織とほぼ同じ身長。骨格も華奢だから、その人造乳房を入れると、紗織のブラジャーがちようどフィットするのだ。

ブラジャーとショーツ姿の自分を姿見に映した後、充はメーカーヤツプテーブルに座った。

充がはじめて女装したのは、中学の時だ。

それ以前、小学校の高学年頃から、自分の中に人とはちがう、奇妙な嗜好しこうがあることに気づいてはいた。

しかし、そのもやもやをどう解決したらいいのかわからなかった。ただ、自分がきれいな服を着て女の子になったところを想像しては、幼い「しるし」を固くするばかりだったのだ。

中学二年の夏休みのある日。当時、近くのスーパーでパート勤めをしていた母が出かけた後、ひとりつ子の充が留守番をしていると、小包が届いた。

配達人に印鑑がいると言われ、どこにあるのかわからなかった充は、父と母の部屋に入って、箆笥の引き出しを手あたり次第に開けて探した。

そこに、母のブラジャーを見つけたのだ。その瞬間、全身に電流が走ったような気がした。

前から、それがそこらあたりにあることを知ってはいた。しかし、その時初めて、自らの手でその引き出しを開けたことで、自分がずっと探していたものは、もしかしたらこれなのかも知れないと、思い至ったのだ。

上の開きにあつた印鑑で用を済ませた後も、充はその引き出しを開けたままにして、しばらく眺めていた。

それをすぐ手に取るのは、やはりためらわれた。

その時、充の頭の中に、同級生の女の子たちの姿が浮かんだ。

彼女たちの夏用の白いセーラー服の襟元から時折見える、すべすべと柔らかそうな生地でできたその下着。授業中にも、前に座る子の背中に透けて見える、細い肩紐。自分がいつも着ている味気ないランニングとはちがう、どこか秘めやかなその下着……。

（このままいけば、僕は一生、あんなふうには、自分の

体に「秘密」をまとうことはできないんだ。）

そう思うと、なんだか胸のあたりがしめつけられるほど、切なかつた。

（そう：：母さんが帰って来るまでにはまだ何時間もある：：それまでは、家の中には僕一人だけだ：：ここで僕がちよつと手を伸ばせば、すべてが変わる：：ただ、着てみるだけじゃないか：：そんなにいけないことじゃない：：。）

充の思いは、そんなふうに傾斜していった。

そして、そう考えると、ブラジャーだけではなかった。その部屋には、充を誘うさまざまなものがあった。

同じ引き出しにはスリッパが入っていた。洋服箆笥の中には、母のよそ行きのノースリーブのワンピースが吊るされているはずだ。部屋の隅には、化粧品を並べた鏡台だってある。

充は決心すると、やおら家じゅうの鍵をかけてまわ

った。

父母の寢室に戻ると、着ているものを脱いで、おずおずとそのブラジャーに腕を通す。震える手で、背中のホックをとめる。

ちよつと大きい母のショーツをはき、ブラジャーのカップには靴下を丸めて入れた。スリッパをかぶると、その柔らかい布が、異性を知らぬ肌をなまめかしくすべった。はじめて身につけた女物の下着は、充の全身

を震えさせた。

そのあと充は、ワンピースを着、見様見真似で化粧してみた。

まだ体ができあがっていない小柄な少年は、短髪であるにもかかわらず、いや、それだからこそよけいに、鏡の中で蠱惑的こわくな娘に変身していた。

あかい口紅が塗られた唇が、

「すきよ」

と動いた……。。

その日以来、女装への誘惑が充を虜にした。その夏休み、父や母が休みの日以外は、毎日、その秘めごとをつづけた。夏休みが終わった後も、母の目を盗んでは、それを繰り返した。

ただ一度だけ、充は、その行為を母に見つかつたことがある。

高校一年の時、親戚の家へ行って夕方まで帰ってこ

ないはずだった母が、思わぬ時間に帰宅したのだ。

それを目撃した母はショックを受けたらしく、泣きながら充を叱った。しかし、それだけだった。その行為を思春期の突発的な衝動のせいとでも思ったのだろう。父に言いつけることもなく、その後、そのことに触れることもなかった。

母に見つかり、恥ずかしい思いをした充は、それ以後、その行為を慎んだ。

しかし、完全にやめたわけではない。家族旅行などの話が出るたび、受験を理由に自分は行かないと言い、「二人だけで楽しんでおいでよ」と父母を送り出しては、証拠が残らないよう警戒しながら一人秘かに女装した。

大学受験が近づき、東京の大学を志望したのは、なにより、一人暮らしをすれば、思う存分女装できると思ったからだ。そして現実には、充はそんな学生生活を

送った。

大学を出て、帰郷してほしいという父母の願いを退けたのも、婦人服専門のアパレル企業に就職したのも、すべては、自分のそんな嗜好を満足したいがためだった。

独身時代の充は、販売員という立場を利用して、閉店後、売りものの服を持ち出しては着てみて、翌朝、元に戻しておくようなこともした。充が男性販売員の

中では頭抜けたコーディネート腕前を發揮できたのは、そのおかげだったかもしれない。

しかし、充の女装趣味は、もっぱら自宅でひとり楽しむだけだ。女装して外出したこともなければ、他の人間に女装姿を見せたこともない。

街で美しい女性を見かけたりすると、自分がそんなふうにも人目に晒されて歩く姿を想像するのだが、実際にそんな冒険をする気にはなれなかった。

それにもうひとつ、セックスの面で、充は自分をノーマルな人間だと思っていた。対象としても、女性しか考えられなかった。

（要するに僕は、女が好きなのだ。自分が女になってしまいたいほどに……）

充は、自分の心情をそんなふう理解していた。だからこそ、紗織とも結婚できたのだと。

「それにしても、あたしって、少しも成長してないのね」

鏡の中で、ドレープで飾られたブラウスを着た女がつぶやいた。充は高校時代を思い出し、苦笑した。

今自分がやっていることは、高校時代とまったく同じ。あのころ、父母が旅行に行った隙に、母の服で女装していたのと同じように、今、妻が海外に出かけるたびに、こうして妻の衣装を着、女になっている。ま

つたくなんの足しにもならないこんなことを繰り返している自分が、ばかばかしくも思えるけれど、どこかかわいくもあつた。

「すきよ」

鏡の中の女は、中学時代、彼女がはじめてこの世に誕生したときと同じせりふを、まるで歌うようにつぶやいた。

栗原家で送っている現実の生活を度外視すれば、今

ほど充にとつて幸せな時期はない。

この部屋は、少年時代の父母の寝室より、大学時代の下宿より、そして独身時代のアパートよりも、ずっと多くの“宝物”であふれていた。かつての充には絶対に手の届かない高級な服、下着、そしてアクセサリ。昔、欲しくてたまらなかつた人毛のウィッグすら、何種類も揃っている。その上、持ち主である妻は、母とともに、よく長期の旅行に出かけ、留守にするのだ。

紗織と結婚したことは、これだけでも”価値”があったというものだ。

シルクのブラウスにワインカラーのベルベットのスカートというスタイルを鏡の前でじゅうぶんに堪能した充は、次の服に着替えようとクローゼットを開けた。

服を選びながら、ふと壁の時計に目をやるとすでに六時近くになっている。

始めたのが、昼前だったから、もう六時間もこうし

ていたことになる。アクセサリーやウイッグはもちろ
ん、メイクやマニキュアまで、服に合わせて変えてい
るのだから、時間がかかって当然と言えば当然だった
が：：。

「よく考えたら、お腹がすいたわね」

充は、その、ひとりだけのファッションショーをい
ったん中断して、何か食べようと思った。そして、そ
のままの姿で一階のキッチンに降りた。

離れのまわりは生け垣に囲まれていたから、まず心配はいらないのだが、万が一家政婦か誰かに見られな
いようにと、出窓のブラインドを降ろす。

「……雨？」

外は雨が降り出しているらしい。

充は冷蔵庫の中から、夜食用に備えてあるレンジ食品を見つけた。

今、ウエストを出したくないのと、元来が小食なの

とで、そのクリームパスタだけで、今日ただ一度の食事を済ませた充は、そそくさとダイニングテーブルを立った。

紗織は十日間も留守にしているのだ。べつにあせる必要はない。それなのに、充は、なんだか気が急いた。

（まだ楽しめそうな服はたくさんある。もっと楽しみたい。もつといろんな女に変身してみたい。）

そう思った。

そのせいだろう。煌々と電灯のともる二階の廊下の、カーテンもブラインドもない窓の前を通った時、母屋の二階からこちらを見ている人影がいたのに、充は気がつかなかったのだ。

3

午後八時過ぎ。充は、相変わらずそれをつづけていた。外は雨がずいぶん強くなってきたようだ。

先刻から充は、姿見の前でターンを繰り返していた。

充が体をまわすたびに、綺麗なブルーのパーティードレスの裾がふわりと開いてはすぼまる。大きなサファイヤのイヤリングが軽やかに耳たぶをゆする。そしてロングソバージュの髪が、大きく開いたネックラインの背中を撫でる。全身を包む、女ならではのその感触が、うれしい。

「あなた、すてきよ、とつても」

充は、胸にまでかかってきた髪の毛を背中にはねる

仕草をしながら言った。

と、その時だった。

姿見の端に映った背後のドアが音を立てて開いたのだ。

充はターンした勢いでそのまま振り向き、そして、反射的に硬直した。

そこに立っていたのは、義父の耕造だった。絹のナイトガウンの肩のあたりが、雨で濡れている。

いったん耕造の顔を見つめた後、充は目を泳がせた。冷や汗が全身ににじみ出た。心臓が早鐘のように打つた。

耕造は、そんな充を睨むようにずっと見ていた。

ほんの数秒間だったかも知れない。が、充にはそれが、まるで何時間にも感じられた。

耕造は、後ろ手にゆっくりドアを閉めると、低い声で言った。

「やっぱり、君だったか」

「お義父さん、これは、つまり……」

充は必死に言いわけを考えた。

耕造は、二三步、充に近づくと、その姿を上から下まで、冷たい視線で、もう一度ゆっくりと見た。

「……つまり、その、仕事上のことで……、そう、仕事で必要だったんです。次のシーズンのコーディネートトを考えて、買いつけ案を……、ですから、必要に迫

られて……」

「……なるほど」

「そ、そうなんですよ。手近には、紗織の服しかなか
つたし、……すみません……こんな恥ずかしい真似を
して」

「ふむ。しかし、それにしておかしいね」

「……えっ？」

「たとえば君の言ったとおりだとしても、化粧までする

必要があるのかね。それに……」

耕造は、傍らのベッドの上に目をやった。そこには、先刻着替えたブラジャーとキャミソール、それにペチコートが放り出したままになっていた。

「下着まで着替える必要があるとは思えないがね」

「い、いや、つまり……」

「いずれにしても、君のしていることは、まともな男がやることではないね」

「は、はい。それは……。す、すぐ、脱ぎます」

「いいや、脱がなくてもいいさ」

「……え？」

耕造の言葉に、充は思わず聞き返した。

「要するに、充君、それは君の趣味なんだろ」

表情をまったく表に出さずに言った耕造に対して、
充は狼狽した。

「いいから、そうしていたまえ」

充は、耕造が嫌みでそう言っているのだと思った。しかし、その時、こちらを見ている耕造の顔が、なぜだか少しやわらいだような気もした。

「君はなかなか綺麗だよ。いや、君の女装は相当なものだ。私が知っている女装者の中にも君ほどのものはいない」

「……は？」

耕造の意外な言葉に、充は惚けたように、その顔を

見た。

耕造は、そんな充をよそに、すたすたと歩いて、ツインのベッドの片方に腰掛けた。

「酒は、ないかね？」

「……え？」

「スコッチかなにか」

「……あ、はい」

充は、耕造の静かだが有無を言わせぬ口調に、反射

的に動いて、サイドテーブルの上にあつた寝酒用のウイスキーを手にとつていた。

「氷が、ありませんが……」

「いや、ストレートでかまわないよ」

充は、伏せてあつた二つのグラスの片方にウイスキーを注いだ。それを耕造に手渡したとき、耕造はまた、充の全身に目を這わせた。

膝丈のスカートから出ているストッキングの脚が、

なんだか情けなかった。前かがみになったネツクライ
ンから露出した肩の肌が、無性に恥ずかしかつた。そ
して、その恥じらいが、充の仕草をよけいに女らしい
ものにしてしまっていた。

「君も、やらないかね」

「……は、はい」

充は、耕造の眼差しに場が持てず、後ろを向くと、
その言葉に従って、自分のぶんの酒も注いだ。

注いではみたものの、そのあと、どうしていいかわからない。グラスを持ったまま、こんな状況でつつ立っているのも、いかにも間が抜けていた。背中には耕造の視線を痛いほど感じながら、充はどうしたものかと思案した。

「しかし、実際の話、驚いたよ」

ウイスキーを一口飲む間があった後、耕造は言った。そして、充が振り向くのを待って、つぶけた。

「君に、こんな趣味があるうとはね」

その視線には、もう先刻までの冷たさはなく、なんだか面白がっているような色さえ見える。しかし、その嘗めるような眼差しにうつむいた充は、自然に、ちよつと体をよじるような素振りをしていた。

「ふふ、可愛いよ。羞恥する女は、なんとも可愛らしいものだ」

「……お義父さん、……虐めいじないでください」

充は、蚊の鳴くような声で言った。

「いや、充君。私は君を虐めているのでも、からかっているのでもないよ」

耕造は、小さく笑い声を立てると、もう一口ウイスキーを喉に流し込んだ。

「最初は驚いたが、今の私の気持ちは、むしろ浮き立っている」

「……？」

「やっと君と私との接点が見つかったんだ。これでやっと、私は君を許せる。いや、歓迎できるかも知れない」

うつむいていた充は耕造の真意をはかりかね、少しだけ目を上げてうかがった。すると耕造は、こう言ったのだ。

「ここへ来ないか。私の隣に」

「……えっ？」

「いいから、来たまえ！」

一転して、耕造は強い口調で言った。

その語気に、充は、反射的に一步前に踏み出していた。耕造は、すかさず充の腕を取り、強い力で引き寄せた。手にしたグラスの酒がこぼれそうになり、そちらに気を取られた充はよろけて、耕造の体にもたれ掛かるように、ベッドに座っていた。

「充君。君と私の運命的な和解に乾杯しようじゃない

か」

耕造は片手でグラスを捧げ、そして、もう一方の手を、なんと充の肩にまわしてきた。

「……そして、二人の秘密に」

「あ、お義父さん、なにを……」

充はあいている方の手で、耕造の手を払おうとした。

「だからこれは、二人だけの秘密さ」

耕造は二の腕で、充の肩を抱きかかえるようにし、

その指先で充の首の下あたりのむき出しの肌を撫でた。

「お義父さん、やめてください」

充は、その手首をつかみ、引き離そうとする。

「君もわからん人間だな。今、君の置かれている立場はどんなものか、よく考えてごらん」

充の抵抗にもかまわず、耕造はつづけた。

「もし私が、このことを紗織や恭子に言ったとしたら、

どうなるね」

充は耕造の言葉に、一瞬抵抗をやめた。

「君は一度はこの贅沢な暮らしを知ってしまったんだよ。ただ贅沢なだけではない。こんなふうに君の趣味を満喫することだってできる贅沢さなんだ。失いたくはないだろ。私は絶対にだれにも言いはしない。だってそうだろう。いまや私も、君の共犯者になろうとしているんだから」

耕造は、グラスを置き、充を抱き寄せた。年齢のわりには上背もあり、たくましい体躯の耕造に、いくら若いとは言え、貧相な体の充はかなわない。

「君は、この栗原耕造を共犯者にするんだ。そうなれば、私は嫌でも君の後ろだてにならざるを得ない。たとえ紗織や恭子が何を言おうが、私は君の味方になるだろう。しかし、もしここで、君がつまらん見栄にこだわれれば、君は、今の立場さえ失ってしまふんだよ」

耕造は、充の耳で揺れるサファイヤに唇を寄せて言った。吐息が耳にかかり、力が抜けた充の手からグラスが落ちて、床に酒がこぼれた。

「そんなことになるより、君はここで女としての本当の悦びを知った方が幸せなんじゃないのかね」

「……本当の、悦び？」

体をひねり、耕造の腕からすり抜けようとしながらも、充は聞き返した。

「そう。女装には慣れていても、どうやら君は、まだ処女のようにだし」

耕造は、そう言いながら、ドレスのネックラインから手を差し入れてきた。

「お義父さん、なにするんですか」

「ほう、シリコンゴムの乳房か。いい感触だ。いいかい。ゲームだよ。私と君だけのロールプレイングゲーム。君は、まだ男を知らない生娘だ。その君が、地位

も名誉もある、人生経験も豊富な男に抱きすくめられている。おびえおののくのも無理はない。しかし、君の若い肉体は、やがて君のそんな気持ち裏切りはじめるんだ。今、私の右手は、君のたわわな乳房を揉んでいる。その手の動きに君の若い敏感な乳房は、嫌が上にも感じはじめています」

「お義父さん、……お願いですから、やめてください

……」

充は、耕造のたくみな誘導に、自分がからめとられていくような気がした。

「ほら、見てごらん。今、私は君の乳首をつまんでいるよ。ここには性感体が集中している。ここから始まった刺激が君の全身に伝わっているはずだ。もっと素直に肉体の声を聞いてごらん。感じるだろ。君の体は私に抱かれたがっているんだよ」

「お：：義父さん、：：あ、：：」

「ほら、君は認めたくないかも知れないが、今、君の体は私の腕の中でのけぞりかけた。君は女なんだ。のけぞりなさい。私が受けとめてあげる。声を出してもかまわないよ。ここには、私と君しかいないんだから」

「だめです……お義父さん……」

「そんな呼び方はやめなさい。君は無垢な処女で、私はそんな君を導く年上の男。そう。パパと呼ぶのがいい。君は……ミチルだ。どうだい、女らしい可愛い

名だろ」

耕造は、一方の手を、充の膝に置き、スカートをたくし上げた。充はその手をつかみ、逆に裾を降ろそうとするが、首筋を這い始めた耕造の唇のせいで、手に入力が入らない。ついに耕造の手はまくれ上がったスカートから、充の内腿へと侵入してきた。

「あ：：いけません：：」

充は必死になって膝を合わせるが、耕造の手はそれ

を開かせ、充の秘部に達する。

「ほらごらん、ミチル。ミチルのクリトリスが、こんなに固くなっているよ。濡れはじめてもいる。素直におなり。ミチルの体は求めているんだよ。さあ、私のことを、パパと呼んでごらん」

「いけません。だめ……です」

耕造にたくみにペニスを愛撫され、充の体から完全に力か抜けた。

耕造は、その手をストッキングとパンティの中に滑り込ませてきた。

「……やめて、ください。だめ……、あつ、だめ……よ、……パ……パ」

充はそう言っていた。自分の口から出たその言葉に、充自身が驚いた。

「そう。それでいいんだ、ミチル。どうだい？　感じるだろ」

耕造は、充のペニスを軽く握ると、しごき始めた。けっして強く握ってこないだけに、燃えきらず、くすぶった感覚が、充の全身に充満していく。その感覚の中で漂うように、充の全身が揺れはじめた。

「あー、：：：パパ」

抵抗しきれなくなつた充は、まるで何かを探るように、顎をつき出し首を振った。すると、耕造が、それに応えるように、唇を重ねてきた。

充はあわてて唇を引いた。

「ミチル、逃げることはないだろう。今はむしろ、お前の側から求めてきたんだよ」

「君」という呼び方が「お前」に変わった。充は、もう堪えきれなかった。何かにすがりついていなければ、自分が崩れ落ちるような感じがしたのだ。

充は両方の手を耕造の背中にまわし、その口にキスした。耕造の舌が、充の唇を割って入ってきた。その

間も、耕造の手は充の秘芯をソフトに摩擦しつづけて
いる。充はその巧みな動きに我を忘れ、耕造の口を吸
い、舌を絡めた。

しばらくして、耕造が唇を離したときには、自分の
側から、それを追おうとさえもした。

「ミチル。お前のそんな顔、すごく可愛いよ。セクシ
ーだ」

自分の行為に、そして耕造の言葉に、今度は、激し

い羞恥がこみ上げてきた。

「恥ずかしい……」

充は耕造の胸に顔を埋めるようにして、半身をくねらせていた。

「そう。恥ずかしいけれど、うれしいだろ。それが、女なんだよ。いいかい、ミチル。よくお聞き。綺麗に着飾ることは女の悦びの半分。あと半分は、誰かにそれを脱がされることだ」

いつのまにか耕造は、一方の手でドレスの背中のフ
アスナーを降ろしていた。そこから手を差し入れ、抱
くようにしながらドレスを脱がしていく。

「ミチルは今、私に脱がされて、その可愛いスリッパ
姿を目の前に晒しているんだよ。どうだい、恥ずかし
いだろ。それなのに、いや、だからこそ、ミチルのこ
こは、こんなに感じている」

耕造がドレスを腰まで降ろすと、充は自ら腰を浮か

せ、それに協力していた。耕造は、ペニスを握っていた手で、ドレスとともに充のパンティとストッキングを一気にずり下げてしまった。

「……あ、ん」

すでにのぼりつめる寸前までいっていた充は、耕造の手が、そこから離れたことで、切なそうに体をゆすった。

「ミチル、ちよっとお待ち。処女のお前にとって、次

にはもつともつと恥ずかしいことが待ち受けているんだよ。女の悦びの真髓を知るためには、その恥ずかしさに耐えて、男を受け入れなければいけない」

耕造は、今度は充の手を取り、それをパジャマの上から、自分の股間にあてた。充は驚いて、手を引こうとしたが、耕造の力に負け、それを握らされていた。「ミチル、逃げてはいけないよ。お前は今、生まれて初めて男のものに触ったんだ。おびえるのは当然だ。

でも、よく考えてごらん。私のものが、こんなに太く、固くなっているのは、誰のせいかな？　すべてミチルのせいなんだよ。ミチルがあまりにも淫乱なんで、私のはこんなになってしまったんだ。私がさつき、この部屋に入って来た時から、お前は、これが欲しくてたまらないという目で私を見ていたね」

「……そんな……」

「いいや、お前は生娘のくせに、男が欲しくてたまら

ないんだ。ちがうかね？」

耕造は、充の目をのぞき込み、決めつけるように言
った。

「……」

充は、耕造の視線の前に、自分の意志が溶けてなくな
っていくような感じがした。そして、そのことが、
無性に心地よくもなっていた。

「さあ、今度はミチルの番だよ。私のものをこんなに

してしまった償いをしておくれ。どうしたらいいか、よく考えてごらん。……わかるだろ？」

充は、ごくんと生唾を呑み込むと、うなずいていた。そして、崩れるように、耕造の膝の上に倒れ込んだ。

ガウンを開き、パジャマのズボンを下げて、ブリーフの上からそこに頬づりする。さらに太く固くなつていくそれが、充の唇に鼓動を伝える。

充はおずおずとブリーフを引き下げると、そこから

出てきた黒光りする肉棒を頬張った。ほのかな異臭と、そして顎が痛くなるほど太くなったそれに、むせそうになりながら、充は必死でそれを吸った。

「ほらごらん、ミチル。お前は今、下着姿で私の股間に膝まづいて、私のものをくわえている。口紅を塗った唇が、濡れて、うれしそうだよ。やっぱりお前は淫乱な女なんだ。そうだろ」

充は耕造の言葉にこれ以上ないほどの羞恥を感じな

がらも、そこから口を離すことができず、ただいやいやをした。

「よく嘗めるんだ、ミチル。ミチルの唾液でいっぱいにしておくれ。そうしないと、あとでお前の処女を奪うとき、お前自身がひどく痛い思いをしなければなら
ないんだよ」

充はそれをくわえたまま、おびえた視線で、耕造を見上げた。

翌朝。

充は昼近くに起き出し、全裸のまま階段下に降りて、シャワーを浴びた。

体中が痛んだ。特に腰のあたり……。初めて外から押し開かれたその部分の局所的な痛みと、腰全体を被う鈍い痛み、そして、体内にいまだに残る異物感……。

結局、昨夜耕造は、明け方近くまで何時間にも渡って、充のその部分を責めつづけた。「いっそ、一気に」と懇願する充を焦らし、その身体と神経がぼろぼろになるまで、さまざまなた体位を試させた。充は、生まれてはじめて味わう淫蕩いんとうで強烈な刺激の前に、ただ翻弄

されつづけたのだった。

ぬるめに調節したシャワーの湯をその部分にあてながら、充はどうしようもないほど惨めな気持ちに陥っていた。

（僕はいったいなんてことをしてるんだ。なんであるの人の言いなりになったりしたんだ。こんなことを、もし、紗織が知ったら：：）

暗い気分の中、シャワーのおかげで何とか生氣を取

り戻した充は、バスルームを出て、服を着た。

空腹だった。

しかし、何をする気にもならなかった。今日が土曜で助かったと思った。

しばらく惚けたように、キッチンの椅子に腰掛けていた充だったが、空腹に耐えられず、立ち上がり、離れを出て母屋に向かった。

母屋に行けば、家政婦が朝食を用意してくれる。耕

造と顔を合わせたくはなかったが、もうそんなことは
どうでもいいと思えるほど、虚脱感でいっぱいだった
のだ。

母屋の裏口からダイニングに入ったところで、充は
全身を固くした。

テーブルに、耕造がいた。

耕造は、いつも朝そうしているように、経済新聞を
読みながらコーヒーを飲んでいた。

「……お早うございます」

充は、ダイニングに家政婦が入ってきたのに気づき、そこにつっ立っているのもおかしいと思って、耕造に声を掛け、テーブルについた。

「……うむ」

耕造は、いつものように、新聞から顔も上げずに答えた。そして、家政婦が用意した朝食を充が食べている間中、話しかけることはもちろん、顔を向けること

すらしなかつた。

紗織と恭子がいないことをのぞけば、まったくいつも通りの休日の朝だった。

最初充は、いつものように自分を無視しつづける耕造の態度に、ほっとしていた。今日に限って、耕造が話しかけてでもきたら、とても平生に受け答えられないような気がしたからだ。

ところが、食事をとりながら、耕造の方をちらちら

と窺っているうち、充は自分でも理解しがたい感情にとらわれはじめた。

（この人はいったい、何を考えているんだろう……うべ、あんなことがあったというのに……よく平然と……）
していられる……僕を、あんなふうにして……
よくも、こんな知らん顔ができるもんだ……すこしは
こつちを向てもいいのに……ゆうべ、あんなに僕のこと
を「綺麗だ」「可愛い」なんて言ったくせに……少

しくらい関心を示せばいいのに：：僕は、こんなに傷
ついているんだから：：優しく話しかけてくれれば、
いいのに：：優しくして：：欲しいのに：：」

食後のコーヒーを飲んでいる頃には、充は、ついに
は耕造の方を切なそうに見つめていた。

と、突然、耕造が新聞を畳んだ。

充はうろたえ、目を泳がせた。

「浜田さん。それに、えっちゃんも」

耕造に呼ばれて、二人の家政婦が、キッチンから出てきた。

「はい、何でしょう？」

「どうだろう。二人とも、一週間ほど羽根を伸ばしてきたら」

耕造が突然言った言葉に、二人は何のことだかわからないという顔をした。

「奥さんも若奥さんもないんだ。こんな時でない」と

連休なんてとれないだろ。浜田さん、たまには仙台の息子さんのところへ行って孫の顔でも見ておいでよ。

えっちゃんも浜松の実家へずっと帰ってないんじゃないよ。心配しなくてもいいよ。恭子たちには秘密にしておくから。私と充君はべつに家で食事しなくてもいいんだ。恭子たちがパリから帰ってくる一日二日前に戻って、家の中を片づけてくれればいいさ」

「でも、旦那様……」

年長の家政婦、浜田が、耕造と充の顔を交互に見ながら、言い掛けて口を噤んだ。自分が留守にすれば、耕造と充の間に摩擦が起きるのではないかと心配しているのだ。もしかすると、紗織に何か言い含められているのかも知れない。

「大丈夫だよ。なあ、充君」

「……え、ええ」

充は、耕造の真意が理解できないまま、うなずいた。

「なあ、えっちゃん、たまには人並にまとまった休みもほしいだろ」

「……はい」

若い家政婦のえっちゃんは、はにかみながらも、うれしそうに返事をした。

「さあ、そうと決まれば、すぐ用意用意。今日は土曜だし、早く行かないと、新幹線の席が取れないぞ」

結局、ポケットマネーから「お土産代に」と臨時ボ

「ナスまで出して、耕造は、固辞していた浜田をも納得させてしまった。」

家政婦二人がキッチンの片付けを早々に終え、帰省の準備のためにそれぞれの部屋に入ったのを確かめると、はじめて耕造はまともに充の方を向いた。

「さあ、二人が出ていく用意をしている間に、離れに戻って着替えておいで。化粧も念入りにね。ミチル、お前は今日から一週間、私の妻だよ」

充は、驚いたように目を見開いて耕造を見た。

(この人は、いったい、なんてことを……)

しかし次の瞬間、充は耕造の目を見つめたまま、深くうなずいていた。

「……はい」

耕造の言葉は、先刻からの成りゆきを見ていた充が、まちがいなく、心のどこかで期待していた言葉なのだった。

日曜日が祭日と重なったせいで、月曜の振替休日も含め、その週末は三連休だった。その三日間、充はずっと女装して、耕造とともに過ごした。

耕造は予定していたゴルフの約束や、財界のパーティーなどをすべてキャンセルし、秘書や専任の運転手すら自宅に近づかないように手を打った。

完全に外界との関係を絶ったその屋敷の中で、食事

の用意などをふくめ、充は耕造の「妻」として、彼の世話をした。もつとも、そうした「家事」をしていた時間より、体を重ねあっていた時間の方が長かったのだが。

耕造は、その年齢からは信じられないほどの食欲さで、充の体を求めてきた。母屋のリビングで、座敷で、離れの寝室で、そして庭でさえも、耕造は充を抱き、さまざまな交合を重ねた。

耕造に女装姿を見られていることに、最初はまだどこか落ちつかなさを残していた充だったが、そんなふうに耕造に求められ、女として扱われることで、精神的な抵抗感は急速に取り払われていった。三日目にはすっかり「ミチル」になりきり、耕造に甘えた。

耕造の言いなりになり、受け身で犯され、貪られることの快感が、いまや充を支配していた。

そんな中で、耕造が語ったことを総合すると、彼は

若い時分から完全な両刀づかいだったらしいのだ。これまで何度か、女装趣味の男性との継続的な”恋愛関係”を持っていたという。結婚前はむしろ、実際の女とより、そちらの経験の方が豊富だとも。

「私はどうも、本物の女の肉体よりも、虚構の『女』の方にセックスアピールを感じてしまうちらしい」

長時間のセックスの後、ぐったりと横たわる充の尻を撫でながら、耕造は言った。

「美しい女装者を見ると、その虚構性を、私の性器で、もつと高みにまで昇らせてみたいと思うんだ。いわば文学的衝動さ。ミチル、お前はすばらしい文学的素材だよ。そして、私の最高の作品になるはずだ」

火曜日からは、充にも耕造にも、通常の仕事があった。充は三日ぶりに男の服を着て、いつもどおり出社した。

しかし、この三日間ですっかり受け身の快樂を身に染み込ませてしまった充は、仕事の場で、自分で考えて能動的に動くことに、非常な辛さを感じた。なんだから自分が、「男装」をして、無理をしているような感じすらするのだ。

だから定時になると、人の目などかまわず、さっさと仕事をかたづけ、帰宅した。

家に帰りつくと、すぐバスをつかい、体のすみずみ

まで磨き上げ、女装し、化粧して、耕造の帰りを待った。以前は、鏡の前で自らが見るために女装していた。充だったが、今では、見られ、脱がされることのために女装するのだ。

そして、夜。

日中も精力的に働いているはずの耕造は、年齢をものともしない体力で、明け方まで充を翻弄しつづけた。充は耕造の老練なテクニックに、くたくたになりなが

ら、
ただただ酔いしれた。

5

そんな、まるで夢に浮かされたような一週間は、あつという間に過ぎてしまった。翌日には家政婦たちが戻って来るといふ金曜日の夜。

「妻」らしくおとなしめのホームウェアを着て、耕造の帰りを待ちわびていた充に対し、帰宅した耕造は「すぐ外出着に着替えなさい」と言った。

「今夜は最後の夜だ。ミチルが私のことを忘れられなくなるような一夜にしたい。まずは、ホテルで食事することからはじめよう」

「えっ、外へ出るの？ そんな……」 「大丈夫だよ。」

お前はもう、どこから見ても立派な女だ。自信を持ち

なさい。私を信頼して、ついて来ればいい。そうだ、私が服を選んであげよう」

耕造が選んだのは、真っ赤なパーティードレスだった。ネックラインはオフショルダーで、肩が完全に露出し、大きく背中が開いている。用心していないと、前も後ろもストラップレスブラが見えてしまいそうなデザインだ。

充は初めての外出にそんな服を着るのは恐かった。

だが、まるで命令するように「これを着なさい」と言った耕造の言葉に逆らえず、その服に合わせ、パール
のネックレスとルビーのイヤリングを選んだ。

ホワイトフォックスの毛皮のショールを羽織り、玄
関を出ると、自らも黒のダブルに着替えた耕造が、ベ
ンツを停めて待っていた。

いつもなら専任の運転手に運転させている車を、今
夜は耕造自身が操った。助手席に座っている間中、充

は緊張しつづけた。これから自分の女装姿をたくさん
の人に見られるのだ。すでに喉がからからに乾き、掌
が汗ばんでいた。

着いたのは、都内でも超一流と言われるホテルだっ
た。

車から降り、ベルボーイに入り口を開けてもらって、
人々が行き交うロビーを横切る。

心臓が早鐘のように打った。穿きなれないハイヒール

ルと、張りつめた神経とで、いまにも倒れ込みそうな自分を、耕造の腕に手をまわすことで何とか支え、それでも充は、不自然に見えないように気を使いながら歩いた。

すこしは息が抜けるかと思つたエレベーターの中でも、乗り合わせた外国人夫婦が、さかんにこちらを見ているような気がして、耕造に隠れるように息をつめていた。

耕造が連れて行ったのは、そのホテルのVIPだけが入れるクラブだった。たしかに盛装して来なければ入りにくい場所ではある。その中でも、充の真っ赤なドレスは目立っていた。薄暗い照明の中で、かえって、むきだしの肩の白さが浮きだしてしまふのだ。

手の込んだフランス料理を食べていても、充には味さえわからなかった。だいいち、緊張のあまり、まともな喉をとおらない。そのぶん、充は乾いた喉に、シ

ヤンパンを流し込んだ。

耕造は、充のそんな様子を面白がるようにこんなことを言うのだった。

「ほら、ミチル。お前の美しさに、みんなが見とれて
いるよ」

充は、恥ずかしさとシャンパンのせいで、うつむいた頬を赤らめた。

「さあ、ミチル、踊ろう」

「え、あたしが？　　：：踊れないもの」

タンゴバンドの演奏に合わせて、ダンスフロアでは、すでに三四組のカップルが踊っていた。

「大丈夫さ。私がリードしてあげるよ」

耕造はしりごみする充をむりやり立たせ、ダンスフロアに連れ出した。

すでに相当酔いがまわっている充は、しかたなく、耕造の胸に身を預けるようにして、ステップを合わせ

た。

耕造にリードされているうちに、充は奇妙なことに気がついた。

(こんなふうなことを、どこかで……)

耕造が音楽に合わせて向きを変え、充の体をまわすたびに、スカートがふわりと開き、ウィッグの長い髪やイヤリングが揺れる。……そう、それは、充が女装して姿見の前で繰り返していたターンだった。

（あの時、僕はいつたい、誰にリードされているつもりだったんだらう？）

すくなくともその架空のパートナーは、女ではなかった。

充は、自分が「女が好きなあまり女装するのだ」と思ってきた考えに、はじめて疑問を持った。

（僕はもともと、女装して、男に抱かれたかったのかも知れない：：あの時、この人が言ったように：：女

装した僕は……あたしは……、あの部屋に男が入って
くるのを待っていたんだわ……この人が部屋に入って
きた瞬間から、この人の体を求めていたんだわ……
「パパ、ミチルを、もつともつと、パパのものにして」
充は、耕造の胸に頬をすりつけ、小声でつぶやいた。
むき出しの背中の中の肌にあてられた耕造の大きな掌
が、熱かった。

ホテルから戻ると、耕造は、充の肩をなぜか乱暴に抱きかかえ、いつもの離れではなく、母屋の、自分と恭子の寝室に連れ込んだ。

この家に来て一年余りたつというのに、充はこの部屋に入ったことがなかった。充ははじめて見るその室内を、うつろな視線で眺めていた。

シャンパンとダンス、そして人の視線に晒されることの緊張から解放され、充はいわば放心状態になって

いた。それなのに——いや、それだから、と言うべきか——体の芯の部分だけが異常に昂ぶっていた。

(早く、抱きしめて欲しい)

思いは、それだけだった。

「ドレスを脱いで、下着になりなさい」

耕造が冷たく言った。

充はその口調にちよつと違和感を覚えながらも、言われるままに、ドレスとペチコート、それにパンティ

ストッキングをとった。ストラップレスブラとパンティだけの姿で、胸に腕を交差させて佇んでいると、クローゼットの奥をがさごそやっていた耕造が、古い革製のトランクを持ち出してきた。

「ミチル、今夜私は、ほとほとお前の淫乱さにあきれかえったよ」

「……え？」

「お前は、本当に淫乱な女だ。あのクラブに入っただけか」

らというもの、ずっと、私以外の男の方ばかり見ていたね」

耕造は、トランクをベッドの上に置くと、睨みつけながらそう言った。

充は、さっきまで優しかった耕造の豹変に驚いて、その顔を見つめた。

「私と踊っている最中にさえ、隣で踊っていた若い男に色目を使っていた。私というものがあいながら、そ

んなに他の男が欲しいのか」

「……パパ、……どうしたというの？」

「今夜こそ、私は、そんなお前を懲らしめてやる」

耕造はそう言うと、トランクの留金を、音を立ててはずし、蓋を開けた。

その中に入っていたのは、ロープや蠟燭、柳鞭、拘束具、太い注射器……。それが責め具であることは、充にもひと目でわかった。

「パパ、いつたい……？」

充は、思わず二三歩後ずさった。

トランクの中からロープを取り出した耕造は、そんな充を追うように、ずかずかと近づき――

「この、淫売め！」

充の頬を、思いきり張った。

まだ、シャンパンの酔いが残っている充は、その力によるめき、床に倒れ込んだ。

耕造は、その上に馬乗りになるや、手にしたロープをすばやく充の体に掛けた。

「パパ、なににするの？」

「ついこの間まで処女だったお前が、男の味を知ったとたん、このざまだ。あんな、男の気を引くための服を着て」

「だって、あれはパパが……」

「黙りなさい。お前は、うれしそうにあの服を着てい

たじやないか。お前が二度と浮気心を起こさないように、お仕置きしてやる」

耕造は、なれた手つきで、充の上半身を何重にも縛り、さらに背中の結び目からたれたロープで、充の両手首を後ろ手に絞り上げた。

「パパ、お願い、やめて……」

耕造は、次に、充の足を強い力でつかみ、くるぶしのあたりを縛った。

充は、まるで芋虫のように床に転がされた。ブラジヤーの上に巻かれたロープのせいで、シリコンゴム製の乳房が、苦しそうに変形している。

「パパ、誤解よ。ミチルは、ずっとパパの方だけを見ていたわ」

「まだ言うか！ ようし、それなら、お前がどれほど淫乱な女か、証拠を見せてやろう」

立ち上がった耕造は、またトランクの中から、何か

を取り出した。

「な、なに、それ……？」

「バイブだよ」

「……パパ、やめて」

充が、おびえた表情で懇願しているのにもかまわず、耕造は充の下半身に近づき、腰を落とすと、パンティを膝のあたりまで一気にずり下げた。

「……あつ、……うっ」

耕造は、いきなり、充のそこに、その張型を突き立てたのだ。充は、顔を歪め、転がったままのけぞった。

スイッチを入れる音がし、微かなモーター音が響いた。

「……あ、あ、ああー……」

充は断続的に突き上げてくるものに、たまらず声をあげた。

「ほら見なさい。ミチル、お前は、べつに私のもので

なくてもいいんだ。こんなものでさえ、お前のクリトリスは、これまで見たこともないほど大きくなっていくんじゃないか。この売女め」

耕造は、峻立する充のペニスを乱暴に握って言った。

「ああ……パパ……、許して。お願い」

「だめだ。今夜は無節操なお前の精神を、徹底的に叩きなおしてやるんだ。しばらくそうしているがいい」

耕造は、そう言ってその場を離れると、いったん部

屋を出て行った。

ひとり取り残された充は、床の上で何度ものけぞつた。

繰り返し、全身の神経を電気のようなものが走る。

腹の中をかき回されている感じだ。やがて、それが感覚を麻痺させてゆき、体の奥の方がぼーっと熱くなつてゆく……。

耕造がグラスを片手に戻って来た。しかし、哀願の

眼差しを送る充のもとには来ずに、ベッドに腰掛け、のたうつ充の姿を見ながら酒を嘗^なめはじめた。

充は焦点の定まらぬ目で、そんな耕造を見ながら、幾度となくつぶやいた。

「……お願い……許して」

しかし耕造は、口のはしに笑みすらたたえ、ただ眺めているだけだ。

どのくらい時間がたっただろう。グラスのウイスキー

―を飲み干した後、耕造はやっと、充に声を掛けてきた。

「そんなに、許して欲しいのか？」

「お願い……パパ」

「お願いします、だろ」

「お願い……します。許してください」

「よし、それなら、はずしてやろう。ここまでおいで」

「え、この格好で？」

「そうさ」

しかたなく充は、全身を縛られたまま、肩と膝を支点にして、まるでしゃくとり虫のように、少しずつ耕造に近づいた。しかし、そんなふうには体を動かして、いと、秘部に挿入されたものが、よけいに肉の壁に食い込んでくる。充は床を這いずりながら、何度も痙攣し、絨毯に顔をこすりつけた。

やっとの思いで、耕造の足元にたどりつき、その顔

を見上げる。首筋に汗が垂れ、ウイツグの髪が張りついているのが自分でもわかった。

「ミチル、言つてごらん。お前は今、何が欲しいね？」
耕造が言った。

「……これを、はずして……」

「そうじゃないだろ！」

充の答えに、耕造は、いつの間に手にしていたのか、柳鞭をいきなり振り降ろしてきた。

「ひっ！」

体を起こしかけていた充は、鞭を背中に受け、また床に崩れ落ちた。

「私は、お前が、この世でいちばん欲しいものを聞いたんだよ」

鞭の先で、充の顎を持ち上げるようにして耕造は言った。

「さあ、言ってごらん。お前が欲しいものは何だね？」

下手な答えをすれば、また鞭打たれることを悟った
充は、耕造の求める答えに思いをめぐらせ、口にした。

「……パパの……、あれが……」

「そうだろ。さあ、それなら、お前の大好きなものを
思う存分味わいなさい」

耕造はそう言うと、ベルトをゆるめ、ズボンとブリ
ーフを下げて、前のものを出した。

充は大きく開いた耕造の股の間に、上体を起こし、

それをくわえた。

アナルには、まだバイブレーターが差し入れられたままだ。突き上げてくるその刺激に体を揺らしながら、充は耕造のペニスに唇と舌を這わせた。

最初こそ、刺激と息苦しさにも、顔を歪めていた充だったが、しばらくそうしていると、それが、心地よい波の中に体をゆだねているような快感に変わっていった。頭の中がぼーっとして、もう何も考えられない。

「ミチル。ほら、あそこを見てごらん」

それをくわえたまま、耕造の指し示す方向を見ると、そこに鏡があつた。

クローゼットの扉の裏についている姿見だ。先刻、そこからトランクを取り出した耕造が、わざと開けたままにしておいたのだらう。角度もぴったりと充のいる場所に合っていた。

鏡の中では、ひとりの女が縛られ、男の股間に膝ま

づいて、そのペニスに奉仕している。つきだした女の尻には奇妙な形をした器具がぶら下がり、揺れていた。背中には、鞭打たれた痕が、ピンクに色づいている。

鏡に映った自分の姿に恥ずかしい思いをしながらも、充には、その行為をやめることができなかつた。もう、意識の上で何を感じようが、体がそれに没頭しているのだ。

「ミチル、さつきお前は、もっと私のものになりたい

と言ったね」

「……はい」

耕造の言葉に、充はやっとペニスから口を離し、その顔を見上げて、小さくうなずいた。

「それなら誓いなさい。もう、これからは誰にも心を許さない」と

「はい、ミチルはパパのものです。パパ以外の誰にも心を許しません」

「ふふ、いい子だ。ご褒美をあげよう」

耕造はそう言うと、充の上半身をベッドの上へのせ、後ろにまわって、バイブをはずした。そして、そこに自分のものを突き立てた。

「……ああ」

充はその時、この一週間でも最高の、いや、これまでの人生で最高の充足感に満たされた。自分はきつと、このために生まれてきたのだ、とさえ思った。

その夜、縛られたまままで、充はさらに激しい責めを受けた。鞭打たれ、蠟燭責めにされ、グリセリンで浣腸され、むせび泣きつつ、嗜虐の悦びに浸った。

明け方近く、耕造は、くたくたになった充をもう一度犯し、やっとロープをといてくれた。そして、もとの優しい耕造に戻って、充を抱きしめた。

充は朦朧とした意識の中で、耕造の胸に顔を埋めた。

「……おや？ ミチル、泣いてるのかい」

「……しあわせだから」

「だったら、もう泣くことはないだろ」

「だって、こんなにしあわせなのに、今夜で最後なん
でしょ。ミチル、もつとずつといっしょにいたい。ず
つとずつと、パパに抱かれていたい」

「わがままを言っちゃいけないな。大丈夫、私に任せ
なさい。悪いようにはしないから」

耕造は、そう言つて、充の髪を撫でた。

6

家政婦たちが戻り、そして2日後には紗織と恭子が
帰ってきた。

栗原家に、またいつものどおりの日々が始まった。

恭子は相変わらず、充を馬鹿にした態度をとりつづけ、紗織も、結婚当時とは打って変わったように、充のことを疎んじつづけた。

しかし、耕造との一週間を過ごした充にとって、それらのことは、もうどうでもよいことだった。

ただ、充が不満だったのは、その耕造自身の態度だ。耕造は、紗織たちが帰ってくると同時に、また以前の耕造に戻ってしまった。あの一週間のことはなかつ

たのだとでもいうように、充の存在には目もくれない。前ほど露骨に無視しているふうではないが、ほとんど話しかけてこない。

充は、そんな耕造の真意がわからず、彼を恨んだ。

（「悪いようにはしない」と言ったのに……）

男の生活に戻った以上、抱きしめてもらうことは無理としても、せめて自分の方をもっと振り向いてほしかった。

結果、充は、紗織と恭子に対して、激しい嫉妬の念を抱いた。

紗織が、耕造に対して「パパ」と呼びかけるたびに、悔しさで胸がいっぱいになった。自分だって、そう呼びたかった。

夜、紗織といっしょのベッドにいても、耕造のことを考えていた。同じ敷地の中で、今、耕造が、あの醜く太った恭子の体を抱いているのだと思うと、いても

立つてもいられない思いがした。

特に充が気になっっているのは、あのトランクに入っていた責め具のことだ。あれが、あの部屋にあったということとは、耕造が恭子に対して使うためにちがいなかった。それが許せなかった。

（今、パパにあんなふうにされる資格のあるのは、あの女のたるんだ肌じゃない。僕：：あたしの、きれいな体のはずよ）

そんなふうにした。

そんなことばかり考えていたから、仕事の方もうまくいくはずがない。ビジネス上の判断ミスや、客先とのトラブルがつづいた。

その上、以前は何とかうまくいっていた紗織との性生活さえ——それが、夫婦関係を保っていた唯一の絆だったにもかかわらず——、ちぐはぐになっていった。耕造に立てた誓いを紗織に対しても守り通そうとした

わけではない。しかし、体の方が、あの一週間で刻み込まれた女としての感覚を忘れられなくなっているよ
うなのだ。男としてうまく機能しないのである。

充は、公私ともに窮地に立たされ、それをどうすること
もできずに、ただ悶々とした日々を送っていた。

一か月後、事態は急変した。

栗原家の全員が揃った夕食の席で、耕造が突然、こ

んなことを言い出したのだ。

「前から考えてはいたんだが、やっと私の会社の環境も整った。充君に来てもらおうかと思うんだが、どうだろうか？」

その言葉に、充も含め全員が食事の手を止めて、耕造の方を見つめた。

「……ええ、パパ、そりゃ、もちろん。ねえ、充さん」
紗織が、あわてたように言った。

「……は、はあ……」

充が言うと、耕造は、充の方を見て、意味ありげにうなずいた。

話の展開に最も意外そうな顔をしていたのは、恭子だった。

それからさらに一か月、前職の整理をつけた充は、耕造の会社に入社した。

充に用意されていた肩書きは「総務部秘書課 部長代理・社長室付」というものだった。要するに、部長待遇の社長専任秘書というわけだ。

社内の誰しものが、充のことを「オーナー社長が自分の後継者として入社させた娘婿」という目で見ていた。

耕造の思惑がどうなのか、充にはよくわからなかったが、ともかく、一日を耕造のそばで過ごせるのが何よりうれしかった。

そして、最初に出社した日の午後、その喜びが何倍にもふくれあがる出来事が待ち受けていた。

その日四時過ぎ、定例の役員会を早めに終えた耕造は、同席していた充に「慣れないことばかりで疲れたろう」と言った。充が「はい、すこし」と答えると、「今日は早めに切り上げるとしよう」と、充を連れ出した。

専用のベンツに乗り、耕造は、運転手に「例のマン

シヨンまで行ってくれ」と命じた。

会社から二〇分余り走った閑静な住宅街。そこにそのマンシオンはあつた。

「今日はもういいから」と運転手を帰した耕造の後に、ついで、そのマンシオンに入っていく時、充の胸には、ある“期待”が膨らんでいった。

六階の一室。ドアの鍵を開けた耕造に押されるようにその部屋に入った途端、充はその“期待”が、“期

待”に終わらなかつたことを確信した。

部屋は、フローリングされた十畳以上はあるワンルーム。大きなダブルベッドと、革張りのソファセット、それにヨーロッパ製らしい重厚なインテリア類で飾られていた。

「そういうこと、なの……ね」

「ふふ。そうさ。恭子や会社の連中に悟られないようにこの部屋を用意するのに、一か月以上かかってしま

つたんだよ。こここの存在を知っているのは、私たちと、あとはあの運転手だけ。奴にしたって、私が女でも困ったくらいにしか思っていない。だから、ここは私とミチルの秘密の部屋だ」

「パパ、うれしい。さみしかったのよ」

充は思わず、耕造の胸にとびこんでいた。

「こら、よさないか。そんな服のまままで抱きつくものじゃない。背広姿の時は、君は私の秘書としてしつか

り働いてもらおうよ。当然、厳しいことも言う。だが、時折、時間をつくって、二人でこの部屋に来よう。この部屋では、お前はミチルだ。その時は、お前のことを思いきり可愛がってやろう。すでにいくらかは女物の服も用意してある。今後は、お前の気に入ったものを買い揃えればいい」

「はい、パパ。すぐに着替えるわ」

うわずった声で答えると、充は、壁のハンガーに吊

るされていたシルクのネグリジエをはずし、それを持つてバスルームに入った。

充実した毎日が始まった。

会社で耕造は、充に「完璧な秘書」であることを要求した。充もそれによく応え、三ヶ月後には、人並に

上に業務をこなせるようになっていた。耕造が口に出して言わなくとも、その考えを察し、先手を打って手際よく段取りをつける。そのことが、充の職業的な喜びとなった。

そして、週に二度ほど、二人は例の部屋を訪れた。

そこでは耕造は、充に「完璧な女」であることを要求した。時にはつつましやかな妻として、時には奔放な少女として、そして時にはマゾヒストの女奴隷として、

充は耕造の求めるままの女になり、抱かれた。どんな場合にも、最後には受け身の快樂の中でむせび泣き、悦びにうち震えるのだった。

今では、充の人生の喜びは、すべて、耕造の存在を前提にしてしか考えられなくなっていた。

しかし、まだ解決されない問題もあった。

紗織との夫婦生活だ。

基本的にファザコンの紗織は、耕造が充を高くかつているらしい様子を見て、充にふたたび、男としての魅力を感じはじめたのだらう。すこし前のように、つっけんどんに扱ったりはしなくなった。しかし、そのぶん、セックスの要求が強くなってきたのだ。夜ごと、紗織は関係を迫った。

「今は一生懸命仕事を覚えなければいけないんだ。疲れきってるんだよ」

そんな口実で、充は紗織との交渉を避けつづけ、
乗り薄のペッティング程度でごまかしていたのだ。だ
が、それももう限界だった。

その夜も紗織は、ベッドの中で充のものに手を伸ば
し、言った。

「どうしてなの？ どうしてこの頃、ちゃんと抱いて
くれないの？」

「だから、疲れてるんだよ」

「また、そんなこと言って」

「本当にそうなんだから、しようがないだろ」

「：：そう、わかったわ。やっぱり、あなた、浮気してるのね」

紗織の言葉に内心ぎくりとしながらも、充はそれを笑い飛ばすともいいうように、こう言った。

「馬鹿だなあ。何を突然言い出すんだよ。そんなことできるわけないだろ。ほとんど毎日、出て行く時も帰

つて来る時も、お義父さんといっしよなんだよ。毎日ずっと、君の父親と顔を突き合わせているのに、君を裏切るようなことが、どうしてできるんだ」

「わかるもんですか、そんなこと」

「そんなに疑うんなら、お義父さんに聞いてみればいい」

「男なんて信用できないから。二人がグルってことだつてあるわ。パパに女ができたのかもしれないって、

ママだってこの頃、真剣に疑ってるのよ」

「えっ……、どういうこと？」

充は、紗織の言ったことが気になって聞き返した。

「あなたは、知ってるんじゃないの？」

紗織は、探るような目で充の顔をのぞきこんできた。

「なんだよ、紗織。いったい何が言いたいんだ？」

「浜田さんたちに洗わせてたからずっと気づかなかつたらしいけど、この間、ママが、パパの脱いだものを

まとめている時、シャツに口紅が着いてるのを見つけたんですって。それから、気をつけていたら、パパの服からときどき化粧品の匂いがするって」

充は内心動揺していた。それは明らかに、充の化粧の匂いなのだ。

「ママは私に、あなたにそれとなく聞いてみてほしいっていったわ。本当は、あなたもパパといっしょになつて、浮気をしてるんじゃないの？　それで、二人で

それを隠している。私にはどうも、そんな気がするんだけど」

充を抱いた耕造の体に化粧の匂いがうつつっているとすれば、その化粧の張本人である充から、その匂いがしないわけがない。たぶん、紗織も母と同じように、それに気づいて聞いているにちがいない。充はそう思った。

「お義父さんも、それにお供の僕も、週に何度か接待

で、銀座のクラブや赤坂の料亭へ行くんだよ。時には、ホステスや芸者がしなだれかかってくることもある。化粧の匂いがうつることだってあるさ」

充はそんなふうに言うと、紗織の体に手を伸ばした。そして、欲情しているさまを演じ、指や唇を使って紗織の疑念を晴らそうとつとめた。しかし、やはり、最後の結合だけはどうしてもうまくいかなかった。

「そうか。そんなことがあったのか」

鏡台に向かいメイクしながら充が話した一部始終を聞きき終え、ソファの耕造は、腕組しながら言った。

「気をつけなければいけないな」

木曜日の夜七時。例のマンションである。

「パパもあたしも、最後にはちゃんとシャワーを浴びて、匂いを落として帰ってるのにね」

「女はそういうことには敏感だからな」

耕造はそう言つて、シガレットケースから煙草を取り出した。

「いけない。社長室にライターを置いてきてしまったようだ」

耕造は、あちこちのポケットを探しながら、言った。

「……じゃ、あたしのを」

充が立ちかけると、耕造が制した。

「いいよ、私が探す」

「背広の右ポケットよ」

充自身は煙草を吸わないのだが、耕造の煙草に火をつけるために、いつもライターを持ち歩いていた。

耕造はソファを立ち、壁に吊るされた充の背広のポケットを探っていたが、ライターとともにそこから出てきたものを手に、首をかしげた。

「どうかしたの？」

鏡越しにそれを見て、充が聞いた。

「ミチル、お前は、この部屋のスペアキーを、車と同じキーホルダーにつけていたよね。ここの鍵だけがなくなっているよ」

耕造は、そのキーホルダーを片手で吊るして、充に示した。

「えっ、ほんと？　おかしいわね。はずしたつもりはないけれど……」

「おいおい、気をつけてくれよ」

「……ええ、……？」

充は、ちよつと考え込んだが、すぐまた鏡の中の自分の顔に見入った。

今夜は、いつもより化粧ののりがいい。充はそのことでうれしい気分になり、鍵のことや、その前に話していたことなど忘れて、メイクに熱中した。

耕造が煙草を吸い終わったとき、メイクを終えたスリップ姿の充が、席を立った。

「どお？」

「うむ、今夜はいちだんとセクシーだよ」

「うれしいわ」

充は耕造に近づき、その首に両手をまわし、膝の上に甘えて座った。

「さあ、今日はどんなふうにかわがってやろうか？」

耕造は、充の細いウエストを抱きながら言った。

「……また、縛って」

充は、ちよつと恥ずかしそうに、小さな声でつぶやいた。

「ふふ、お前はだんだんマゾになっていくようだね。こつちへおいで」

耕造は、充を立たせ、クローゼットのそばまで連れていくと、そこからロープを出し、充の体にかけた。

「ねえ、パパ。ひとつだけ聞いてもいい？」

しおらしく背中に両手をまわし、耕造に縛られなが

ら、充が言った。

「なんだね？」

「パパは、あの人にもこんなことをするの？」

「あの人って、：：ああ、恭子のことか」

「ええ」

「ふふ、気になるのかね？」

「こういう道具が、パパとあの人とのベッドルームにもあつたでしょ」

「ミチル、こんなプレイをする時には、お前にそういうことを聞く権利はないはずだよ」

耕造はそう言いながら、ロープをぐつと絞った。

「あつ：：。でも、教えて欲しいの。パパがこんなことをするのは、あたしにだけであつて欲しい」

「ふふ、可愛い奴だ。しかたがないから、教えてやろう。本当のことを言えば、私は根っからのサディストというわけでもない。要するに虚構のセックスが好き

なだけだ。私がSMの味を覚えたのは、恭子と結婚してからでね。あいつは、ああ見えて、ベッドの中では根っからのマゾさ。結婚当初から、私に縛られ、鞭打たれることを望んだんだ。だから、私がサディストになっただよ」

「じゃ、今でも？」

「時にはね」

充はその言葉に、少し悲しそうな顔をした。

「しかし、あそこまでぶくぶく太られては、それも興ざめでね。この頃は、とんとご無沙汰しているよ。今、虐め甲斐のあるのは、ミチル、お前だけさ。さあ、できた。私に余分なことをしやべらせた罰に、今日はお前を吊るしてやろう」

耕造はそう言うと、ベッドに充の体を投げ出し、その真上の天井につくり付けられた鉤に、ロープの端を

掛けた。

耕造が力を込めて引くと、充の体が持ち上がり、ベツドの上で宙づりになった。ロープがきしみ、体じゅうにさらに食い込む。

「いい光景だ。さて、このあとどうしてくれようか？
バイブか、それとも浣腸か？」

耕造のよく通る低音が響いた。

充は、その声だけで、もう体の芯が熱くなってくる

ような気がした。

と、その時だ。とんでもないことが起こった。

部屋のドアが、いきなり開いたのだ。

振り向いた耕造も、宙づりになった充も、そして入ってきた二人——恭子と紗織だった——も、一瞬声を失った。

耕造は不意うちの驚きで、充はそんな姿を誰であれ人に見られた恥ずかしさで、恭子と紗織は突然目の前

に現れた異様な光景に、それぞれ本質的ではない部分で、まずショックを感じて、立ちすくんだ。

そして、全員が、状況を理解しようと黙り込んだ。

しかし、状況認識が深まれば深まるほど、それぞれがさらに混乱していくようだった。

「何てことを……」

まず、耕造が口を開いた。しかし、そのあとが続かない。恭子が現れたことはもちろんだが、耕造にとつ

て何よりショックだったのは、愛娘の紗織までがいつしよにやってきたことだったのだろう。

「もしかして、……充さん……？」

充の方を呆然と見つめていた紗織が独り言のように言った。

充は、紗織から顔をそむけようとしたが、体をひねった反動でロープが回転し、かえってその視線に化粧した顔を晒すことになってしまった。

「どうして、どうしてなの……」

恭子が言った。その「どうして」には、どうして充とこんな関係になってしまったのかということだけではなく、「どうして私を吊るしてくれないの？」といううマゾヒスティックな哀願の響きも、たしかに混じっていた。

そしてまた、全員が黙りこくった。

(あの鍵だ。それに、運転手……)

充は、いまさらそんなことを考えても何の足しにもならないのに、なぜ二人がここに突然現れたかに頭をめぐらせていた。

：：恭子が運転手からこの部屋の存在を聞き出し、紗織が充のキーホルダーに見つけた不審な鍵を抜き取る。耕造と充を送ったあと、運転手が栗原家に通報し、二人がここに駆けつけた。たぶん、耕造と充がそれぞれの女と、ここで情を通じているとも思っていたの

だろう。言い逃れできないように現場を押さえようと、いきなり部屋に入った。そして……。

だいたいそんなところにちがいなかった。

息が詰まるような沈黙がつづいていた。全員が、この事実と状況をどう打開したらいいのかわからないまま、立ちすくんでいた。自分が今、どうしたいのかさえ、わからないままに……。

突然、耕造が動いた。

つかつかと充に近づくと、なんと、先刻から手にしていた柳鞭でつづけざまに宙吊りの充の体を打ち据えたのだ。

「この色魔め。お前のせいだぞ」

それは充にとって、これまで以上に意外な展開だった。

耕造は、すべての原因を充におおいかぶせようとしているにちがいない。充は完全に耕造に裏切られたの

だ。

充は鞭の痛みと、その悲しみに身悶えた。しかし、それでもどこかでそれを快樂と感じているらしい自分の体が、なおさら悲しかった。

耕造は、中空に揺れる充をさらに打ちつづけた。

と、恭子が耕造の足にすがりつくようにして叫んだ。

「だめ、やめて……お願い。私も……私も、ぶって」

「そうだ、お前もだ。この牝豚め」

耕造は、足元にひれ伏した恭子にも鞭を振り降ろした。

充と恭子に交互に鞭を振るう耕造の姿を、いまだ呆然と見ていた紗織が、叫んだ。

「やめて。もう、やめて。みんな：：みんな狂ってるわ」

そして、その場に泣き崩れた。

鞭に体をのけぞらせながら、遠のく意識の中で、充

は思った。

これで、自分の人生も、そして、栗原家も、すべてが崩壊する、と。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまですを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

完全版を入手する

セイント・スイート・ホーム

Saint Sweet Home

<公開版>

CopyRight 1991 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500